PDF版

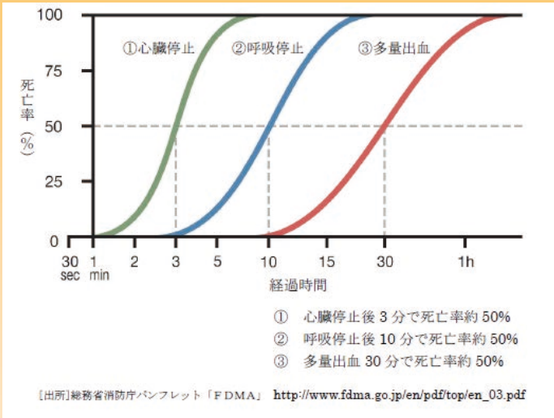
事故を防ぐために

① 絶対に目を離さない！

首浮き輪を使用中の乳幼児の溺水事故は、いずれも浴槽で発生しています。これらの事故は、保護者が自らの洗髪や衣服を取りに行くなどのわずかな時間、目を離したときに発生しています。そもそも、首浮き輪は目を離さないで使用する商品です。もし首浮き輪を使用するのであれば、取扱説明書等の注意表示をよく読み、絶対に乳幼児から目を離さないようにしましょう。

② 発見が遅れると重症化することも！

救命救急の経験則を示したグラフ「カーラーの救命曲線」で「呼吸停止」を見ると、呼吸停止後３分弱以内の死亡率は非常に低いですが、呼吸停止後約５分を過ぎると死亡率は急上昇します。また「心臓停止」を見ると、心停止後１分過ぎから死亡率は急上昇します。



カーラーの救命曲線

③ 空気を十分に入れましょう！

首浮き輪に入れた空気の量が少ない場合は事故につながるおそれがあります。空気の量が適切か、漏れていないか、ベルトが外れていないか、あごが首浮き輪にのっているかなど、確かめましょう。取扱説明書を十分に読んで、注意深く使いましょう。

●本内容は、独立行政法人国民生活センターホームページ内の「くらしの危険」コーナーにてダウンロードできます。
http://www.kokusen.go.jp/kiken/index.html

●本内容の詳細は、独立行政法人国民生活センターホームページに掲載しています。
http://www.kokusen.go.jp/

「くらしの危険」は、全国の消費生活センター、医療機関等から収集した情報をもとに、
被害や事故の未然防止・拡大防止のために作られています。
特定の商品・サービス等を推奨するものではありません。
商品やサービス、設備によって起きた事故の情報を最寄りの消費生活センターにお寄せください。
無断転載はお断りいたします。

独立行政法人
国民生活センター
〒252-0229 神奈川県相模原市中央区弥栄3-1-1 TEL.042(758)3165 ●2014年11月発行
イラスト＝川崎 敏郎

くらしの危険

Number 322

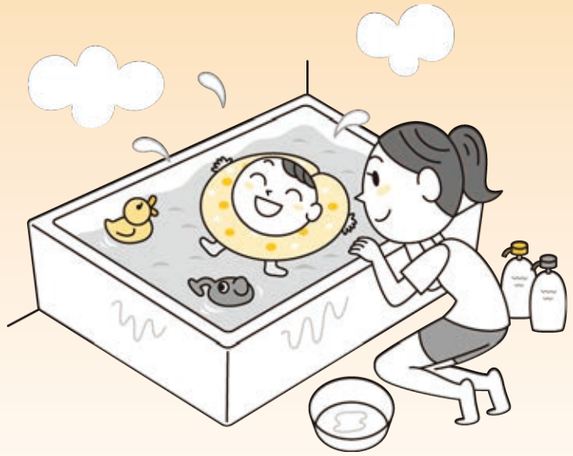
気をつけて、浴槽での首掛け式浮き輪の事故！！

2012年7月27日、消費者庁と国民生活センターは、首掛け式の乳幼児用浮き輪（以下「首浮き輪」といいます）に関する事故の防止について、注意喚起を行いました。

しかし、この公表後も同種の事故情報が6件確認されました。

首浮き輪を使って入浴している乳幼児は楽しそうに見え、保護者も安心して、つい目を離してしまいがちです。一人で乳幼児をお風呂に入れる際に首浮き輪を使うと便利である、といった使用者の感想が個人ブログ等で見られますが、安心しないでください。

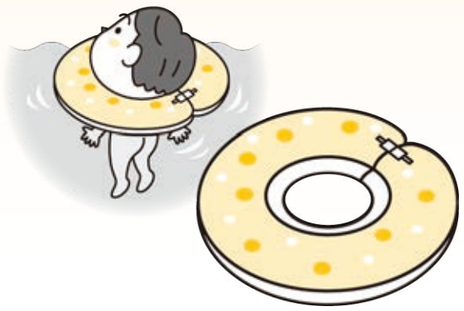
乳幼児は、口や鼻が水に浸かった状態が5分以上続けば、極めて重症度が高い傷害が残ることがあります。乳幼児を入浴させる際は、たとえご機嫌でも、保護者の皆さんは一瞬でも子どもから目を離してはいけません。



首浮き輪とは

C字型になっている浮き輪を乳幼児の首に取り付け、C字型の開口部を首の後ろにくるようにして、浮き輪の上下のベルトをはめて使用するものです。

本体や取扱説明書等には、「あごが首浮き輪の穴から下にさがる状態で使用しない」「保護者の方は目を離さず、お子様に手が届く範囲でお使いください」「空気漏れがないか確認してください」などの表示があります。



PDF版

こんな事故が起きています

医療機関ネットワーク（＊）や「日本小児科学会 こどもの生活環境改善委員会 Injury Alert **（傷害速報）」では、首浮き輪に関する事故情報が報告されています。**

（＊）生命または身体に被害が生じた消費生活上の事故情報を参画医療機関から収集し、国民への注意喚起などに活用することを目的としている事業です。（消費者庁と国民生活センターの共同事業、2010年12月より情報収集を開始）

ケース 1 空気を７割くらい入れて使っていた（日本小児科学会の傷害速報より）

自宅の浴室で、子どもに首浮き輪をつけて子どもだけを浴槽に入れていた。首浮き輪は、上下のベルトをはめて、空気は７割程度入れた状態だった。母親はミルクの準備をし、トイレを使用後に浴室に戻ってみると、子どもが首浮き輪から抜け、うつ伏せになって浮かんでいた。首浮き輪の上下のベルトは外れていなかった。子どもを引き上げると、全身は紫色で、目は見開いており動かなかった。胸を数回押すと口から水が出て、やがて声を出して泣き始めたが、救急車を呼んだ。

(4か月の女児)

ケース 2 母親が洗髪中に鼻が塞がった状態になった（日本小児科学会の傷害速報より）

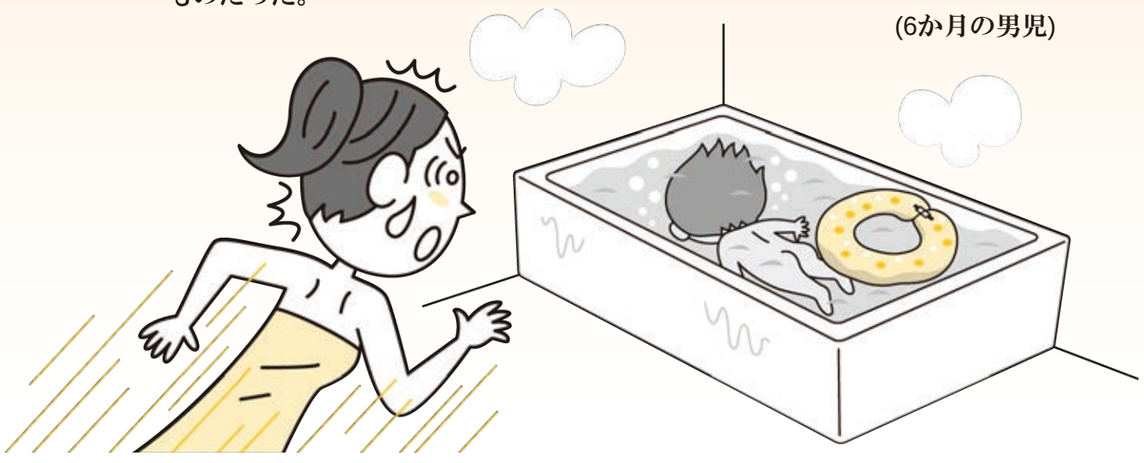
母親と入浴中、子どもは首浮き輪をつけて一人で湯船で遊んでいた。母親は洗髪で目を離していた。1～2分で音が聞こえなくなり見たところ、顔面はチアノーゼで便を漏らしており、首浮き輪で鼻が閉塞し、口は水面下にある状態だった。首浮き輪のベルトは締めていたが、やや空気が抜け気味だった。

(6か月の女児)

ケース 3 おむつ等の準備のため、1分くらい浴室を出た

首浮き輪をつけた子どもを浴槽に入れたままで、この日に限って衣服やおむつの準備をするため1分ぐらい浴室を出た。浴室に戻ると、子どもがうつ伏せ状態で底に沈んでおり、すぐに抱き上げ救急車を呼んだ。
この浮輪は、周囲の母親から便利だと聞いて、生後1か月頃から使い始めたものだった。

(6か月の男児)



首浮き輪の危険性をテストしました

首浮き輪の代表的な商品を、取扱説明書に記載された方法で６～９カ月の平均的な女児を模した乳児ダミーに装着し、空気量とベルトの有無を変えながら、どのような危険性が考えられるかテストしました。（2012年7月27日の公表内容、くらしの危険No.310より）

空気が入っている状態

首浮き輪に空気が入っている状態では、通常、顔が水中に沈んだり、首浮き輪が外れたりすることはありませんでした。しかし、乳児ダミーを首浮き輪の後側に押し付けるように移動させると、あごが首浮き輪から落ちるようになり、この状態で上下にゆすると、鼻の近くまで水面がくることがありました。

あごが首浮き輪から落ちてしまうと、
鼻の近くまで水面が来ることがありました

あごが首浮き輪から落ちて、
浮き輪の下まで口が下がってしまったところ

空気が少ない状態

空気が少ない場合、首浮き輪がV字に沈み込みやすくなり、顔の周りに水がたまりやすくなることがありました。また、乳児ダミーを前傾にすると、首浮き輪が折れ曲がってしまい、口や鼻がふさがれてしまうことがありました。
下ベルトを外した場合、上下にゆすると鼻まで浸かってしまうことがあり、上下両方のベルトを外した場合には、口や鼻まで水に浸かったり、首浮き輪が外れて乳児ダミーが水没することがありました。

空気が少ない場合、
首浮き輪がV字型に沈みやすくなりました

下ベルトを外した場合、
ゆすると顔まで浸かることがありました

●このテストの詳細は（独）国民生活センターホームページ商品テスト結果「首掛式の乳幼児用浮き輪を使用する際の注意について」で見ることができます。